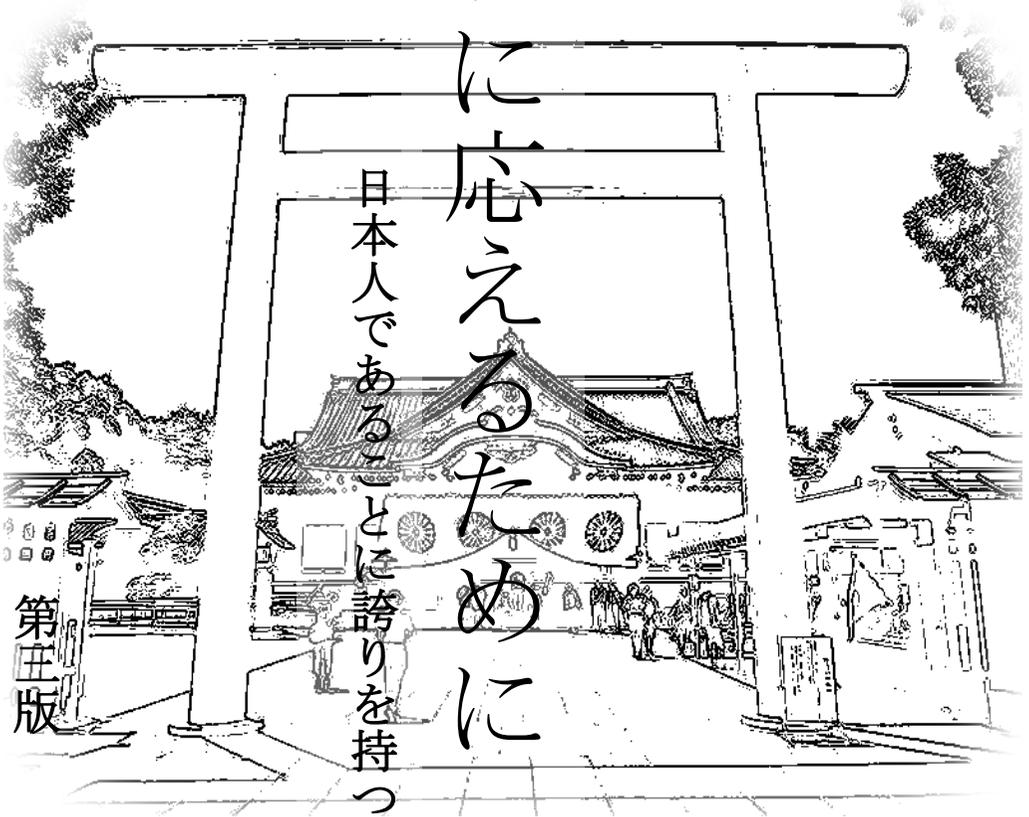


平成二十九年さくら祭

ご英霊の思いに
応えるために

日本人であることに誇りを持つ



第5版
平成二十九年

靖国神社

世の中で戦争ほど大きな悲劇はありません。

戦争という極限状況の真ただ中で、人はいかに生きようとし、また、みずから燃焼させていったのか。

若者たちは、時代の要請に応え、私情を断ち切り軍服に身を固め、泣きごと恨みごとと言わず、敵の蹂躪から祖国を守るために、黙々と戦場へと赴きました。

そして多くの若者たちが、戦野にその屍をさらしました。いかに時代が変わろうとも、日本人として、この事実は決して忘れてはならないことだと思えます。

平和な現代、この平和な中で、最も愛すべき人に暴力を振るったり、また傷つけたりする事件が数多く聞かれます。ところが過去あのような激動の時代においても、現代人には及びもつかぬ、真直ぐで美しい心をもった人々がキラ星の如くこの日本に輩出したという事実を、一人でも多くの若者たちに知ってもらいたいと思うのです。

本冊子は、戦争という極限状況の中でも、人間性の尊厳を失うことなく、真実の愛と勇気と優しさをもつて、己れの人生を燃焼させ尽くした人々の哀切な生きざまを取り上げました。

これが自分の任務であります

日露戦争、遼陽の会戦（一九〇四、明治三七年）のときのことである。豪雨の中で一人の日本兵が、露軍の負傷した捕虜を、高粱殻ことうがやんの積み上げられた山の中の軒下に押し入れていた。その日本兵は捕虜を入れてしまうと、またズブ濡れとなって立哨をつづけた。それを見ていたひとりの参謀が声をかける。

「何で外にいるか、汝も中にはいつて雨を避けよ」

「濡れては可哀そうですから、負傷者だけ入れてやりました」

ためらいもなくそう答えて、その兵は沛然はいぜんと降りしきる雨の中で平然と立哨をつづけた。

また同じ会戦のときである。いつ露軍の砲弾が飛んでくるか

わからぬ砲壘の中庭で、一人の日本兵が露軍の捕虜を、背墻はいしやう

(塹壕ざんごう)の陰の安全な場所に押しやり、自分はふたたび危険な中庭に立った。それを見た師団の副官が兵に言う。

「お前も背墻の陰にはいれ」

すると兵は、姿勢を正して答える。

「これが自分の任務なのであります」

鴨緑江の戦いで、瀕死の重傷で倒れ伏し水を懇願する露兵に、水筒を手渡したある日本軍の将校は、後日、手記にこう書き綴っている。

「この露兵に対するこのときの私の心持は、敵でもなければ味方でもなく、一視同仁、彼もまたその自国に対して義務を尽くした勇敢なる兵士であるという、深い感激をもって眺めたのだった。……たった今まで、我に抵抗していた者でも、もはや

抵抗する力がなくなつた者に対しては、かならず憐れみを加えることは、古来よりの日本の武士道であると共に、今日としては全世界の人類道徳であり、私としては任務として、また、人間と



水師營(大連市旅順)

(日露戦争終戦時、乃木大将とステッセル大将との会見場所)

して、尽くしたに過ぎなかった」と。

捕虜を辱しめたくはありません

歩兵第三連隊第八中隊長・守永弥次大尉は、ある日、中隊集合を命じた。露兵を見たことのない隊員に、生擒いけどりにした捕虜を中隊として見学に行くかどうかを諮はかったのである。ことに兵卒が捕虜に対してどう考えているかを、中隊長ははっきりと知っておきたかった。

その結果、中隊の半数が捕虜見学を希望し、残りの半数は希望しなかった。中隊の誰もがまだ一度も露兵を見たことがない。だから捕虜見学には魅力があつたにもかかわらず、半数が見学を希望せずと答えたのである。中隊長は、希望せずとした兵に理由を尋ねる。
ある兵は答える。

「近いうちに戦場で見参するのですから、今みないでもよろしいのであります」
また、ある兵は答える。

「別段みたいと思わないからであります」
幾人目かに、金子亀作一等卒がこう答えた。

「気の毒でありますから、参りたくありません」
金子一等卒の答えに、中隊長は反問する。

「気の毒とは」

「武士は、相見互いでありませぬ、参りたくありません」
ふたたび中隊長は反問する。

「武士は相見互いとは」

「自分は在郷のときは職人でありま
す。軍服を着たからは日本の武士であり
ます。」

どこのどういう人か知りませぬが、敵
ながら武士であるものが武運拙く捕虜
となつてあちらこちらと引き回され、見
世物にされること、さだめて残念至極で
ありましようたまたまと察せられ、気の毒で耐
りませんから、自分は見学にいつて捕虜を
辱しめたくありません」

中隊長は深くうなずいた。さらにこの
答えは中隊の全兵士に感動をよび起こ
し、前に見学希望と答えた兵士たちも、
全員その答えを撤回した。中隊長は凜然
と兵に命ずる。

「金子のいつたことに、中隊長はまっ
たく同感である。中隊は気の毒な敵に、
いささかたりとも侮辱をあたえたくな



乃木希典(長州藩士)

日露戦争の勝利で凱旋した乃木大将は、
明治天皇に「天皇陛下万歳を喚呼し、多くの
忠勇なる将兵を旅順で失い……」と、自分の
責任をお詫びし、むせび泣きされたと言わ
れています。

乃木希典は、明治天皇の後を追って自決
するまで、日露戦争で戦死した将兵の魂を慰
め続け、また遺族や傷病兵にもできる限りの
援助を捧げられました。

当時、米英はじめ世界の戦力をもつてしても、落とすことが出来ないと言わ
れた難攻不落の旅順を落とし、黄色人種が初めて白人に勝利した世界の英雄・
乃木大将。この後、アジアの殆どが白人社会の植民地であった時代から独立の
気運が高まったといえると思います。

さて、乃木希典が長野師範学校で講演を求められた時のことです。
乃木希典は演壇には登らず、その場に立つたまま
「私は諸君の兄弟を多く殺した乃木であります」
と一言言つて絶句し、その場で涙を流されたと言われ、いつも心の中に大きな
責任を感じておられたと思われま

日露戦争後、乃木希典が責任をとつて自決するのではないかと心配された明
治天皇は、孫、後の昭和天皇の教育のため、乃木希典を学習院長にされまし
た。

その乃木希典が学習院長として最後のお別れの講義を小学生にされた時、
乃木希典は「日本はどこにある？」と生徒に質問されました。

三、四人が「東洋の東側」「緯度何度」といった地理的な返事をしました。

乃木希典は「それぞれに間違いはない」、そして、自分の胸に手を当て「本
当はここにあるんだよ」とおっしゃつて、静かに壇上を降りて、学習院を去つて行
かれました。

そして、明治天皇の崩御の際、自らの命を絶たれたのであります。

い。金子がいった通り武士は相見互い、ゆえに捕虜見学に行かないことに決定する」
時として戦場には狂気が充満する。だが、その狂気を制圧するのもまた人間の心である。

「その頃の日本人の間には、この一等卒とおなじ線を心に抱いているのが正常だった。さればこそ守永中隊長に会心の喜びをさせ、捕虜見学を望んで手をあげた中隊の兵卒をして、言われてみればそうだったと、無言のうちにはたちまち同意させた。それは、みんながそうしたものをも心の底に持っていたればこそだった」

武人の心得を論じた感動的な話であり、日露戦争期の日本の軍人が、いかに勇敢に闘い、いかに敬意を表して露軍と対峙したかを、今改めて知る感動の話である。日本人の軍人と書いたが、露軍の軍人も、同じように敵対する日本軍に対し、勇敢に、敬意を表して戦った即ち武士道と騎士道が激突した世界の歴史に残る戦いが日露戦争と言われている。

この万倉護国神社にも、日露戦争で散華された十一柱のご英霊を祀っております。当然百年前の出来事で、其の片鱗を知っている方もいません。しかし、今に伝えられる歴史書を読むに、当時の人々がなんと格調高い精神を持っていたのか、今に生きる我々が学ぶべき精神は多々あると思われれます。

さて、時は流れ、大東亜戦争時

坂井三郎と聞けば、少し戦記に詳しい人ならああ零戦のエースだなど思い出すはず。

坂井はパイロットとして零戦に乗って二百回以上も出撃し、敵機六十四機を撃墜するという突出した数字が残っています。

大東亜戦争が始まってすぐの頃、坂井は南方戦線でインドネシア上空を飛んでいた際、オランダ軍の輸送機が飛行しているのを偶然発見したことがあった。輸送機といえど、敵の重要人物が搭乗しているかもしれない、^だ拿捕^ほもしくは撃墜せよという命令が出ていた。坂井はオランダ軍の輸送機に近づいていった。

「護衛はいないようだな・・・」坂井は周囲に目をくばりながらつぶやいた。撃墜すべきか警告射撃をすべきか、思案しながら近寄ることにする。用心のため太陽の方角から接近した。近寄ると、機体は陽光にキラキラ輝いている。窓があつて多くの顔が自分に向けられているようだ。

坂井はさらに零戦を接近させた。陽光がさしこみ暗い飛行機の内部を照らし出す。窓を通して飛行機の内部がすみずみまで見渡せた。

なんと機内は負傷者ばかりで、彼らは恐怖でひきつった表情でこちらを凝視しているではないか。

彼らは鬼のような日本軍の戦闘機に飛行機もろとも撃ち落とされるかもしれないと恐怖に悩んでいたのだ。

窓越しに看護婦らしき女性と幼い少女が抱き合ったままおびえた表情で見つめているのも見えた。

このとき坂井は心の中で自問自答した。

「坂井三郎。そうだ、お前は大日本帝国海軍の栄えある戦闘機乗りだ。相手が敵機なら存分に戦いましょう。しかし負傷者と女子供の乗っている飛行機は敵ではない。お前は敵を見なかった」



坂井三郎氏。平成 12 年に逝去
84 歳 最終階級 海軍中尉

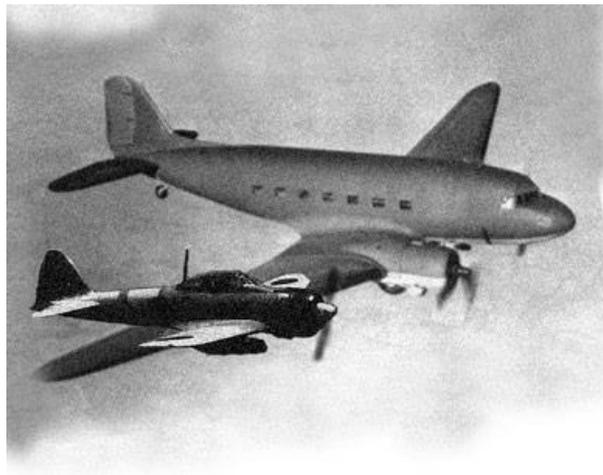
坂井は自分のこの言葉に一人うなづく、女性そして多くの負傷者たちに軽く手を振り、翼をひるがえして輸送機から離れ、大空の彼方に消えていった。

これは軍紀からすると命令違反であったが、坂井は基地に帰ってからも飛行中に何ら敵らしきものは発見せずと報告した。この出来事は誰にも知られることもなくこのまま過去の闇に忘れ去られるはずであった。

ところが戦後五十年もたつてから、この話は多くの人々に知られることとなる。当時その輸送機に乗っていた看護婦だった女性の一人が、偶然、坂井の著書（大空のサムライ 一九五四年出版）を見て、零戦に描かれたマークから彼がそのときのパイロットだと探しあてたのである。

「私があのと見えた飛行機の胴体にもこれと同じマークがあったわ。私たちの輸送機に近づいたのはこのパイロットにまちがいない」
彼女はそう確信すると、国際赤十字を通じて照会を依頼した。するとまもなく事実確認がなされ、坂井だったことが判明した。こうして運命的な出会いは実現することになった。女性は坂井に言ったそうだ。

「あのととき輸送機に乗っていた人々は、ほとんどが負傷者、病人、老人、女性や子供でした。みんなあなたの飛行機を見て悪魔が来たと思いました。でもあなたは笑って手を振って遠ざかっ



オランダ軍輸送機と零式戦闘機

ていきました。みんなは歓声をあげてそれこそ抱き合って喜びました。そして全員あなたに心から感謝したのです。あそこにいた人々は、その後、多くの家族を持ちました。あなたは多くの人々の命を救ってくれたんです。かけがえのない命の恩人なのです」
そう言つて、女性はあらためて五〇年前のシーンを思い出すと涙を流して坂井の手をとったという。

最近痛切に感じるのは、「戦後」といわれて半世紀をはるかに超える歳月が過ぎましたが、果たして今が「戦後」なのかという疑問です。明治維新（一八六八年）から日露戦争開戦（一九〇四年）までが二十六年、日露戦争終戦（一九〇五年）から大東亜戦争開戦（一九四一年）までも三十六年。

そして大東亜戦争終戦後、すでにその倍近い七十年余が経過しています。そこから導き出される結論は、すでに「戦後」ではなく、新しい「戦前」ではないかということです。現在世界各地で起きるテロ。第三次世界大戦だと表現する人もいます。しかし、ぜひとも戦後であり続けて欲しいと誰もが思うのです。

しかし戦争に歯止めをかけるのもまた人間です。人類の永久平和を考える時、護国神社のご英霊、祖国日本のため命に変えて戦ってくださいました。そのことを忘れることなく、その当時の格調高い精神に学ぶことは、戦争を抑止するきわめて大きな要因にもなるであろうと思うのです。

参考

日本捕虜志

（長谷川伸著）

大空のサムライ（坂井三郎著）等より

（第三版

平成二十九年さくら祭）

万倉護国神社社務所発行

平成二十九年四月